

オサムシくん 手塚治虫

みなさんは「オサムシ」を知っていますか？

「こみの中にいる黒い小さな虫です。オサムシというのが本当の名前です。」

五才から兵庫県宝塚市でくらしたまん画家、手塚治虫さんの「治虫」というペンネームは、このオサムシからとったものだそうです。

手塚さんは子どものころから虫が大好きでした。今の宝塚はたくさんの家やマンションが建っていますが、手塚さんが子どもの頃は森や畑ばかりの農村でした。手塚さんは石原くんという同級生と、毎日のように虫とりをしていました。近くに「こん虫館」があり、めずらしい虫をつかまえると、そののびとに名前を聞くこともありました。手塚さんは小学校のころに、およそ三千もの標本をつくったといいます。

小学校三年生のころ、「こん虫図かん」という子ども向けの図かんを買ってもらいました。手塚さんは、その図かんを何度も何度も見ましたことでしょう。そして「オサムシ」に出会います。

じっくり見ていると、なんだか自分になているように感じます。本人によると、「首が長く、目がぎよろつとしていて、顔つきも悪い。しかも、夜、出歩くのが大好き」と説明されています。

「顔も似てるし、やることもぼくにそっくりや。」

そう思って「オサムシ」をもじって「治虫」というペンネームに決めたそうです。

子どもの頃の手塚さんの虫好きは、たいへんなものでした。それは中学校になっても続きます。ちよつと十五才のころ手塚さんがかいたこん虫の絵が残っています。これが、見事な出来ばえなのです。とても十五才の少年がかいたとは思えないすばらしさです。手塚さんの絵は、きっと虫をえがくことで上達していったのでしょう。

その後、手塚さんは医学部に進み、お医者さんになります。と中で、まん画家になることを決意します。大好きなまん画を通していろいろなことを人々に伝えたいと思ったのです。このとき立ち上げた会社の名前は「虫プロダクション」。手塚さんはここでも虫にこだわったのです。

その虫プロダクションの小林準治さんによると、手塚さんは、六十才でなくなるまでの間に、七百ほどの作品を残しましたが、そのうち約八十の作品に、「こん虫」が登場するそうです。こん虫が主役である作品もたくさんあります。

小林さんは、こう言っています。

「どの作品にも、こん虫に対するやさしさがありません。」

手塚さんの作品には「いのち」をテーマにしたものが数多くありますが、これも手塚さんのこん虫に対するやさしさと「こん虫の短くはないいのちへの思いがあったからではないでしょうか。

手塚さんは大人になっても少年の心をわすれず、多くの人たちに愛されるまん画をかき続けたのです。